

資料渉猟余話

その10

亡き父寿一が日本を代表する短歌結社誌だったアララギに参加したのは昭和5年、24才の教員駆け出しの頃である。翌年、妙琴公園風越プールで松尾小学校の水難事故が起こり、担任としての責任をとって辞任。名古屋の覚王山にて青山物外老師のもと一年間僧堂生活を送ったのち教職に復帰する。それ以前にすでに道元を学んでいて、父の教師人生は道元研究と歌人の両輪だった。ちなみに金田千鶴のアララギ入会は赤彦が没した大正15年で25才、隣家の尾曾一

らポツンと数冊だけ出てきた中の一冊が、太平洋戦争開戦直後の昭和17年(第35巻)の11月号で1月号だけあった空白域に加わったり、昭和28年(第46巻)などは10月号だけ欠けていて、まるでジグソーパズルの最後のピース

『アララギ』と『ヒムロ』

池田健一

今年で父は没後20年を迎えるが、このほど復刻版を含めたすべてのアララギ誌およびヒムロ誌と膨大な量の個人歌集を座光寺の「南信州地域資料センター」に収めるとともに一角を割いて整理を進めている。あるお宅か

スのように空所にましまと嵌まつたりの快感もあった。まだ大正期及び平成から廃刊までも欠ける部分が多い。ご活躍を祈念する一方で、不要になったら今後1冊でも2冊でもいいので資料センターに連絡いただきたい。



アララギは明治41年、最初の3冊だけは「阿羅々木」として伊藤左千夫を中心に千葉県山武郡睦岡村埴岡49番地「埴岡短歌会」の名で創刊されているが、その2年前の明治

で、翌4年2月号からは島木赤彦(久保田俊彦)になる。アララギの廃刊は父が亡くなって4年後の平成9年12月である。同人たちは4派に分かれてその流れを継承している。

の歌にある「アララギの紅の実を食むときは父母恋し信濃路にして」に基因しており、信州の郷土木とされるイチイの木を指していると思ってきた。それ以後と錯覚していたヒムロも樹木と捉え、アララギに対比するもの

39年に父が現在の虎岩449番地で生まれている符合も面白い。その後、正岡子規門下生中心の根岸短歌会の機関誌として発展する。斎藤茂吉の名が編集兼発行人に記載されるのは大正3年5月号から

一方、「ヒムロ(氷牟呂)」は島木赤彦によつて明治36年に創刊されている。要するに赤彦が信州の教職員中心の歌人らをヒムロに結集したのはアララギより5年も早くであつて、機関誌「ヒムロ」も氷室を意味するようだ。造園樹木を専門とする私はアララギもヒムロもつきり樹木の名と早とちりしていた。勝手に由来を解釈していた。アララギは茂吉

高い」といった共通項から「蘭」と書かれる。イチイは品位高く寒冷に強い陰樹である。一方、ヒムロはヒノキ科でサワラの変種とされ一番柔らかな葉もつて性質も弱く優しい感じの陽樹なのである。